(C)十勝毎日新聞社

高木美 成年女子3000制し2冠

国体スケート・アイスホッケー

【成年女子3000㍍決勝】終盤に地力の差を見せて2冠を達成した高木美帆

【栃木】第69回国民体育大会冬季大会スケート・アイスホッケー競技会第5日は1日、日光市の霧降スケートセンターなどで競技を行った。スピードスケートは決勝12種目を行い、成年女子3000㍍は、高木美帆（日体大1年―帯南商高出）が4分9秒83で制して個人種目2冠を達成した。同男子5000㍍は、森哲平（北斗病院）が平子裕基の持つ大会記録（6分35秒26）を更新する6分34秒81で準優勝し、引退レースに花を添えた。同男子1000㍍は、今野陽太（開西病院）が1分11秒88で2年ぶり2回目の優勝を果たした。少年女子1000㍍は太田凪砂（帯南商高3年）、同3000㍍は酒井寧子（同）がそれぞれ初優勝。成年女子1000㍍は、松田有幾（岐阜・十六銀行―白樺学園高出）が初優勝、仁科有加那（長野・日本電産サンキョー―帯南商高出）は準優勝だった。十勝勢が多数出場した2000㍍リレーの北海道は、少年男女と成年男子を制した。アイスホッケーの少年男子準決勝で北海道は栃木に1―0で競り勝った。（小寺泰介）

成年男子1000 今野 少年女子1000 太田 3000 酒井V

別格の力「気持ち良かった」

高木美

タイトルへの執着ではなく、「一斉スタートのガチンコレースは面白い」という気持ちのみ。高木美帆は今大会の女子でただ一人、個人種目2冠となった。

前日の1500㍍決勝を再現するように、3000㍍も後方から徐々に順位を上げた。終盤になって飛び出した門奈津実（富山・ダイチ―白樺学園高出）に食い付くと、門をはるかにしのぐスピードで逆転。別格の力を見せつけた。「思い切って滑ることができた。気持ち良かった」と、来月の国際大会へ向けて気持ちも高まった。

一方で、後方で逆転する機会を狙い続けた今大会のシングルトラックレースに、「間が詰まってバタバタ走ることが多く、せっかくの滑りのリズムが崩れてきているかもしれない」と危惧もする。

ワールドカップ（W杯）第5戦（3月7～9日・ドイツ）と世界選手権（同22、23日・オランダ）を万全の状態で迎えるために「もう一度自分の滑りをしっかり修正したい」と気を引き締めた。

粘る滑りでライバルに勝利

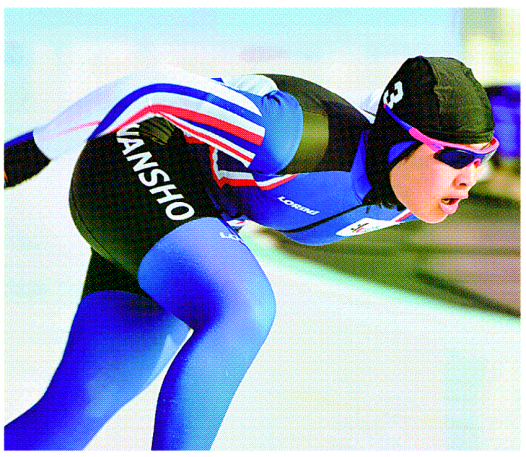
太田

○…現インターハイ女王のプライドだ。少年女子1000㍍決勝は、太田凪砂が昨年のインターハイ同種目覇者の藤森美希（長野）をゴール間近のストレートで鮮やかに抜いて初優勝を飾った。「体力勝負の粘る滑りができた」とうなずいた。

「2人の一騎打ち」は想定済み。序盤は前に出ることなく様子をうかがいながら、得意の後半勝負に持ち込んだ。

今季はインターハイ（1月）が釧路、全日本ジュニア（7～9日）が長野県茅野市と屋外リンクが続き、「風を意識しながら外練習もしてきた」ことで、低い姿勢がしっかりと身に付いている。

世界ジュニア参戦も視野に入れ、「自分の滑りができれば結果も付いてくる」と意気込んだ。



【少年女子1000㍍決勝】低い姿勢でトップスピードに乗る太田凪砂

スタート成功 余裕の展開に

酒井

○…少年女子3000㍍で国体初出場の酒井寧子が頂点に。同じ北海道の佐藤綾乃（釧路北陽高）と共にスタートダッシュに成功し「余裕のある展開に持ち込めた」と振り返った。

2人で集団を引っ張りトップを快走。1周目で佐藤が、2周目には酒井も2回の責任先頭を果たし、後続集団のプレッシャーも受けず自らのペースを最後まで守った。

3位以下を2秒以上も引き離す完勝は「佐藤がいたからできたこと。2人で逃げ切れた」と喜んだ。

【少年女子3000㍍決勝】第1コーナーを力強く回る酒井寧子

負けたくなかった

成年女子1000㍍優勝・松田有幾の話　W杯組の神谷衣理那（毎日元気―白樺学園高出）と高木美帆が優勝していたので、やっぱり自分も負けたくなかった。この大会が終わってまた、モチベーションが上がってきた。

成年女子1000㍍を制した松田有幾と仁科有加那（右から）

思い出のリンクで…

成年女子1000㍍準優勝・引退する仁科有加那の話　できるだけ先に責任先頭を完了しようと迷わず先攻した。高校2年生のインターハイ1000㍍で優勝した、このリンクで競技生活を終えることができ何より幸せ。

成年男子5000

森（北斗病院）大会新で準V

引退に花 万感の思い

若手が台頭した男子長距離界で、森哲平（29）が引退を決意。今大会を最後にスケート靴を脱いだ。

成年男子5000㍍決勝は、ゴール直前にかわされ2年ぶりの優勝に届かなかったものの、平子裕基が持つ大会記録を更新しての準優勝。「五輪には行けなかったけれど、ずっと背中を追い続けて来た平子さんを少しだけ越えることができたような気がする」。表彰台でうっすらと涙を浮かべながら、万感の思いで柔らかな笑顔を見せた。

胆振管内鵡川町生まれ。苫小牧工高、東洋大出身。社会人1年目で初めてW杯へ出場した。バンクーバー五輪（2010年）を逃した後、半年間支援のないままスケートを続けていた森に北斗病院が手を差し伸べ、所属の垣根を越えて平子らと帯広で練習してきた。

「スケート人生の全てをささげた」という今季。実費で1カ月間、カルガリー（カナダ）での高地合宿を組んで全日本距離別選手権（昨年10月・長野）を迎え、5000㍍で自己ベストを1秒更新した。それでも現実は厳しく、ソチ五輪に出場するウィリアムソン師円（山形中央高）をはじめ、高校生3人に続く4位だった。W杯を逃し、ジャパンカップの転戦は屋外リンクが多く「小砂を踏むとエッジの角が丸くなって踏み込めなくなる」と道具の調整にも苦心しながら、諦めずに競技を続けた。

約22年間の競技生活で「スケートが僕を成長させてくれた。これからは、指導者として子供たちと関わっていくことで、帯広や故郷に恩返しができたら」と新しい生活を思い描いた。

「やり切った」。引退レースの成年男子5000㍍決勝で大会記録を更新した森哲平。充実した表情で表彰状を掲げる

最終周猛スパート 2年ぶりの優勝

今野

○…成年男子1000㍍決勝は、今野陽太が前日の1500㍍での不本意な結果を晴らす快走で、2年ぶりの優勝を決めた。

1500㍍は棄権選手が出て、急きょ出場が決まった。前日の同決勝はスタートに失敗。「同じ地区選手のポイント獲得に専念した」と5位に終わり、日本記録保持者としての見せ場をつくれなかった。

今大会は4日間で3種目8本を滑る過密日程だったが、最後の個人種目決勝で再び奮起。最終周で猛スパートを仕掛けて成功し、何度もガッツポーズを繰り返した。

ジャパンカップでは、シリーズのポイントランキング2連覇も懸かっており「最終戦（14～16日・長野）でしっかり結果を出したい」と意気込んだ。

【成年男子1000㍍決勝】２年ぶりの優勝を決めて祝福に笑顔で応える今野陽太（右）